岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第179号（2022）65－74

空想する「桃花源記」

―「桃花源詩」とともに読むことの意義 ―

土屋　　聡

陶淵明は，事実の記録として「桃花源記」を制作する一方で，それを素材として空想に遊ぶ「桃花源詩」を制作した。前稿でのかかる結論を基に，本稿では「詩」が「記」の読解にどのように寄与するのかという問題を取り上げた。「詩」では村の生活の描写が12句を占めるため，従来は学習者の想像によってなされていた「記」の簡潔さを補うことができる。先行事例として中国における「詩」の利用に注目し，「詩」が理想郷のイメージ形成に寄与することを，９つの項目にわたって検証した。また，「空想」という共通項によって，他作品との関連性が見出せることをも明らかにした。作者陶淵明の空想すなわち「詩」に導かれることによって，学習者はより深く古典世界に没入できると思われる。

Keywords：陶淵明，「桃花源記」，「桃花源詩」，補助的教材，空想

一．はじめに

陶淵明「桃花源記」は現行の高等学校国語の教科書に多く採用されている散文作品であるが，一方これに附随している「桃花源詩」は教科書に収録されてはいない[1]（以下，「桃花源記」を「記」，「桃花源詩」を「詩」と略称する）。

近年，補助的な教材として「詩」を利用しようとする提案が出されているが，「記」と「詩」とが内容的にどのような繋がりを持っているのかという問題や，「詩」が「記」の読解にどのように寄与するのかという問題については，なお検討の余地が残されている[2]。前者の問題については，拙稿「『桃花源記』と『桃花源詩』と― その関係についての一考察 ―」（『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』178号，2021年11月）において分析を加え，その結果，「詩」は桃花源の日常を空想によって描くものであり，「記」はその空想の素材という関係が明らかとなった。本稿では，後者の問題について，前稿で得られた「記」と「詩」との関係性に基づき，「空想」ということをキーワードとして検討を加えたい。また，中華人民共和国（以下，中国と略称する）では初級中学の『語文』教科書（初級中学は日本の中学校に相当。また語文は国語に相当）に「桃花源記」が採用されているが，そこでは既に「詩」を関連教材として利用した課題が設定されている。このことは従来の研究ではあまり触れられていないが，「詩」を利用することの先駆的な試みとして考察に加えたい[3]。

二．理想郷のイメージを形成するための「詩」

まず，現行の教科書に依拠しながら，「桃花源記」を読解する上で何が重視されているのかを確認しておこう。次頁の表１は，現行各社教科書における「桃花源記」の設問をまとめたものである。既に指摘されていることではあるが，これを見ると，ある共通点を見出すことができる[4]。

それは，全ての教科書において，村の様子を抽出させる課題が設定されていることである。これは，主に「記」における以下の記述に着目させようとする課題であると考えられる[5]。

土地平曠，屋舎儼然，有良田美池桑竹之属。阡陌交通，鶏犬相聞。其中往来種作，男女衣著，悉如外人。黄髪垂髫，並怡然自楽。

土地 平曠に，屋舎 儼然として，良田美池桑竹の属（たぐ）ひ有り。阡陌 交（まじは）り通じ，鶏犬 相ひ聞ゆ。其の中に往来し種作する，男女の衣著

岡山大学大学院教育学研究科　社会・言語教育学系　700－8530　岡山市北区津島中３－１－１

A Study of Reading “Taohuayuanji” with Imagination: About the Significance of Raeding with “Taohuayuanshi”

Satoshi TSUCHIYA
Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

表１「桃花源記」設問一覧

科目	出版社	教科書	設問１	設問２	設問３	設問４	設問５
国語総合	三省堂	高等学校国語総合古典編改訂版　2016年３月検定済2017年３月	桃花源に着くまでの道筋を、漁人の視点に立って整理してみよう。	桃花源は、どのような所として描かれているか、まとめてみよう。	桃花源の人が、「不足為外人道也」と言った理由を説明してみよう。	「桃花源」という言葉は、現在どのように使われているか、調べてみよう。	—
	第一学習社	高等学校改訂版新訂国語総合古典編　2016年３月検定済2017年２月	桃花源の村の様子を具体的に説明してみよう。	桃花源の世界を描いた作者の意図について考えてみよう。	—	—	—
	明治書院	新精選国語総合古典編　2016年3月検定済2017年１月	桃花源の村に、漁人が引き込まれていくいきさつを、整理してみよう。	桃花源の村の様子や、村人の様子を、まとめてみよう。また、そのようになった理由を、考えてみよう。	後日、他の人々が桃花源の村に到達できなかったのはなぜか、話し合ってみよう。	—	—
古典Ｂ	教育出版	精選古典Ｂ漢文編　2017年２月検定済2018年１月	桃花源の村ができた経緯は何か。	桃花源の村とそこに住む人々の様子はどのように描かれているか。	村人たちはなぜ「不足為外人道也」と言ったのか。	—	—
	桐原書店	新探求古典Ｂ漢文編　2017年２月検定済2018年２月	この文章に描かれている村の風景と村人の生活を、箇条書きにして整理してみよう。	「不足為外人道也」には、村人のどのような気持ちが表れているか、説明してみよう。	この文章には、実際の年号・地名・人名が使用されているが、それらはどのような効果を上げているか、話し合ってみよう。	作者が理想とする社会はどのようなものか、この文章の内容をもとに話し合ってみよう。	—
	数研出版	改訂版古典Ｂ漢文編　2017年２月検定済2018年１月	段落ごとにあらすじをまとめてみよう。	「初極狭～」の段落に述べられている村や村人の様子を、整理してみよう。	「桃源郷」は現在どのような意味で使われているか。調べてみよう。	—	—
	大修館書店	古典Ｂ改訂版漢文編　2017年２月検定済2018年４月	右の文章の中で、村の平和な様子を表している部分を指摘してみよう。	なぜ村への行き方を尋ねる人がいなくなったのか、考えてみよう。	—	—	—
	筑摩書房	古典Ｂ漢文編改訂版　2017年２月検定済2018年１月	「桃花源」は、どのような土地として描かれているか、まとめなさい。	「皆嘆惋」とあるが、なぜそうしたのか、考えなさい。	「不足為外人道也」とあるが、なぜそのように言ったのか、考えなさい。	本文中で用いられている「便」「乃」「即」の意味の違いを、「漢和辞典」などで確認しなさい。	本文中では実際の年号・地名・人名が用いられているが、それらがどのような効果をあげているか、話し合いなさい。
	東京書籍	精選古典Ｂ漢文編　2017年２月検定済2018年２月	次の文を書き下し文にし、現代語訳しよう。（１）不足為外人道也。（２）尋向所誌、遂迷不復得路。	この文章のあらすじをまとめよう。	「漁人」が行き着いた「桃花源」の村はどのような村で、住民はどのような人たちか。本文に即して箇条書きに整理しよう。	—	—

は，悉ごとく外人の如し。黄髪垂髫，並に怡然として自ら楽しむ。

土地は平坦でどこまでも広がり，家々は整然と建てられ，豊かな田畑や美しい池があり，桑や竹などが生えている。あぜ道が縦横に交して種まきをしたり耕したりしている男女のわり，鶏や犬の声が聞こえる。そこに行き来して種まきをしたり耕したりしている男女の服装は，外部の人と同じようである。白髪の老人もおさげの子どもも，みな楽しそうであった。

「桃花源記」を読む上で，この村に魅力的な理想郷の姿を読み取ろうとすることは，ごく常識的な読み方として，恐らく異論の無いところであろう。実際，第一学習社版の教科書（『高等学校 改訂版 新訂国語総合 古典編』）では，コラムの形で以下のように言う。

「桃花源記」が書かれた時代も，史書に「人相食らふ」と記されるほど，戦乱の続く暗澹たる時代であった。桃花源の世界は，苛酷な現実とは全く無縁の別世界である。整然とした豊かな田園風景の中に，農耕にいそしむ男女や，喜び楽しむ老人・幼児を点描し，何ともいえぬ安らぎを与えてくれる。これは，乱世に生きる人々が夢想した理想社会であった。（147頁）

このコラムでは，「記」に描かれた村の様子を指して「理想社会」としている。現行各社教科書の狙いも，恐らく，この部分が理想郷を描いたものであるということを学習者に気づかせる点にあるのであろう。

ところで，もしも学習者自身がこの村に魅力を感じ取ることができなければ，「桃花源記」の授業は成立しないように思われる。なぜならば，「記」の後半において，辞去する漁人に対して村人が「外人の為に道ふに足らず」と秘密の保持を念押しすることや，そうであるにも関わらず漁人が太守に秘密を洩らすこと，また太守が即座に人を派遣して村を探らせたこと，隠者である劉子驥が「欣然として」村に行こうとしたことなどは，いずれも桃花源の村が当時の人々に魅力あるものとして映ったことを意味するものであって，その村の魅力を感得できなければ，学習者は上記の人々の心情や行動も共感できないまま読み終えることになるためである。つまり，村の魅力を充分に味わうことができるかどうかが「記」後半の理解に響いてくると考えられるのである。恐らく，この点が「桃花源記」の授業を展開する際の最も困難な課題であろう。

これを解決するひとつの方法としては，前掲のコラム（第一学習社版）のように，戦乱の時代という背景の中に「桃花源記」を置くことによって，その平和な様子を強調する，ということが考えられる。例えば，戦乱によって荒廃した世界と比較することができれば，「桃花源記」の村が別天地であることは容易に理解できるであろう。しかし，「記」「詩」自体には，当時の戦乱と対比させるような記述は見られない。したがって，もしもこの方向から学習者に読み解かせようとするならば，「記」「詩」とは別の資料（当時の戦乱を描いた詩文など）が準備されるべきであろう。

「詩」を援用することは，これとは異なる方向からのアプローチとなる。村の様子についての「記」の記述は簡潔ではあるが，そのために却って情報量に乏しいものとなっている。その不足を補おうとするところに，「詩」を取り入れる狙いがある。

前稿における「記」と「詩」との分析を通じて明らかとなったことは，「詩」が「記」の記述を基に，それを敷衍する形で――言わば空想をふくらませながら豊かで充実した農村の生活を描いている，ということである。先に引用した「記」の「土地 平曠に，屋舎 儼然として」で始まる一段は，物語の背景の域を出るものではない。しかし，作者は，まず何よりもこの一見平凡な村に着目し，空想を広げながら「詩」として再構成した。ここで桃花源の村の様子について描かれた部分を振り返っておこう。

7 相命肆農耕　　相ひ命じて農耕に肆め
8 日入従所憩　　日 入りて 憩ふ所に従ふ
9 桑竹垂余蔭　　桑竹 余蔭を垂れ
10 菽稷随時芸　　菽稷 時に随ひて芸う
11 春蚕収長糸　　春蚕 長糸を収め
12 秋熟靡王税　　秋熟 王税 靡し
13 荒路曖交通　　荒路 曖として交はり通じ
14 鶏犬互鳴吠　　鶏犬 互ひに鳴吠す
15 俎豆猶古法　　俎豆 猶ほ古法にして
16 衣裳無新製　　衣裳 新製 無し
17 童孺縦行歌　　童孺 縦 に行くゆく歌ひ
18 斑白歓游詣　　斑白 歓しみつつ游び詣る

たがいに声をかけあって農耕にはげみ，日が沈むと思い思いに休憩する。桑や竹はよく育って大きな木陰をつくり，豆や粟は季節に応じて植えられる。春のカイコからは長い生糸がとれ，秋の収穫には天子さまへの年貢がかからない。草深い道は見え隠れしながら縦横に行きかい，鶏や犬はそれぞれ鳴いたり吠えたりしている。儀式や食事の器は昔ながらのものを使い，衣服も新しい意匠のものは無い。子どもたちは自由に遊び歌い，老人たち

は楽しげに訪ねあう。

農耕に従事する村人の姿は，「記」では，ごく簡単に「其の中に往来し種作する男女」と出てくるのみである。これに対して「詩」では，第７～８句「相ひ命じて農耕に肆め，日 入りて 憩ふ所に従ふ」とあるように，彼らの一日の生活サイクルを想像して描いている。

また「記」では，「良田」や「桑竹の属」が存在することに触れられてはいるが，その様子までは述べられていない。一方，「詩」の第９～10句「桑竹 余蔭を垂れ，菽稷 時に随ひて芸う」は，よく茂って大きな日陰を作っている「桑竹」や，時期に合わせた豆やキビの栽培など，「桑竹」「良田」が実際に存在するとすれば，それらがどのように活用され，どのような風景を作り出すかというところまで広げた描写となっている。続く第11～12句「春蚕 長糸を収め，秋熟 王税 靡し」も，「桑竹」「良田」がどのような収穫をもたらすか，という方向で想像をふくらませたものであり，村の豊かさを表現している。なお，この「秋熟 王税 靡し」句は，村が国家による支配と無縁であることを意味するものでもある。

第13～14句「荒路 曖として交はり通じ，鶏犬 互ひに鳴吠す」については，「記」の「阡陌 交り通じ，鶏犬 相ひ聞ゆ」とほとんど変わるところはないが，「記」が取り入れた『老子』の「小国寡民」のイメージを，「詩」も踏襲したということであろう[6]。

第15～16句「俎豆 猶ほ古法にして，衣裳 新製無し」では，村の人々の衣服や調度品が古い様式のものであることを言う。「記」にも，「男女の衣著は，悉ごとく外人の如し」という記述はあるが，この２句は，むしろ「記」に登場する村人の「先世 秦時の乱を避け，妻子邑人を率いて此の絶境に来たり，復た焉より出でず。遂に外人と間隔す」という記述からの想像と考えられる。

第17～18句「童孺 縱に行くゆく歌ひ，斑白 歓しみつつ游び詣る」は，「記」の「黄髪垂髫，並に怡然として自ら楽しむ」を承けたものであるが，「詩」では，子どもたちが思いのままに歌い，老人が楽しそうに訪ねあうなど，彼らの行動が具体化されて描かれている。

「詩」は全32句であるが，実にそのうち12句が以上のような村の生活の描写に割かれている。このことを考えれば，作者がこの村に抱いた興味の深さや憧憬の強さは，おのずから知られよう。「記」とともに「詩」をも授業に取り入れるとすれば，このような作者の興味や憧憬をも含めて学習者に提供することになるのである。

三.「記」の性質と「空想」することの重要性

ところで，このように考えてくると，「詩」を援用することに対して，次のような反論も考えられる。すなわち，「記」自体も作者によって制作された作品であって，「詩」を援用するまでもなく「土地 平曠に，屋舎 儼然として……」という記述そのものから作者の考える理想社会を読み取ることができるのではないか，というものである。

「記」と「詩」との性質の違いについては，川合康三『桃源郷 中国の楽園思想』（講談社選書メチエ558，2013年，講談社。178頁）に次のように指摘されている。

> 「記」は物語の語り手に徹して，作者の意見を差し挟むことはない。それに対して「詩」は作者の判断，意見，個人的な願い，つまりは作者の主体性が露呈している。

前掲の拙稿においては，「記」が中心的存在であって，「詩」はこれに従属するものであること，「詩」は「記」をベースに空想を展開したものであることを確認した。川合氏の指摘は，このような「記」「詩」の関係性に照らして妥当なものである。

ここで，教科書における「記」の捉え方を確認してみよう。以下は，「記」という文体について，各教科書に附された注釈をまとめたものである。

『国語総合』

○文体の一種。多くは事実をそのまま述べる。（三省堂 149頁）

○文体の一種。事実をありのままに述べるもの。ここは，その形式をまねたもの。（第一学習社 144頁）

○文体の一種。物事の経緯を述べ記す文。（明治書院 142頁）

『古典B』

○事柄の経緯を記した文章。（教育出版 56頁）

○文体の一種。事実を述べる文章。ここでは，事実の記録という形を採っているので「記」とした。（桐原書店 42頁）

○－注記なし－（数研出版）

○文体の一種。多くは事実を述べる文。（大修館書店 48頁）

○－注記なし－（筑摩書房）

○文体の一種。事実を述べる文章。ここでは，事実の記録という体裁をとっている。（東京書籍 140頁）

以上のように，「注記なし」を除けば，全ての教科書で「記」を事実や経緯の記録，あるいは表面的にその体裁を採るもの，という説明がなされている。

「記」を創作とみるか事実の記録とみるかについ

ては諸説あって，容易に結論を得がたい問題ではある[7]。しかし，少なくとも形式的には，教科書が「記」を事実の記録として学習者に提示していることは明らかである。

もちろん，記録という形をとった創作がありえないわけではない。しかし，その可能性まで追究することは，高等学校の授業としては複雑に過ぎよう。教科書に即して読むのであれば，「記」は作者陶淵明が不思議な村の話を記録したものとして扱ってよい。

そうした記録を残している以上，作者が桃花源に関心を寄せたことは間違いないであろう。しかし，この話に対して，作者がどのようなところに興味を抱いたか，あるいは理想を見出したか，という彼の思想や価値観の表明は「詩」が担っているのである。そうでなければ，「記」に従属する形で「詩」が製作されることはない筈である。

また，「記」では，桃花源の村の広い土地や整然とした家々，あるいは「良田」「美池」といった田園風景，そこで働く男女や楽しげな様子の老人や子どもたちに言及がなされている。確かに，このような個々の要素を数え上げていけば，理想的な農村の姿を客観的に指摘することは可能かもしれない。しかし，そのことと学習者がその情景を味わうということとは，必ずしもイコールで結ばれないように思われる。上田武「教育課程の改訂と漢文の授業――陶淵明の詩文の読解指導覚え書き・続」（『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』41号，1983年）は，「桃源のイメージをどのように再構成するか」という問題意識を持って展開された授業の実践報告である。なお，この実践は，「記」のみを読み込むという方針で行なわれており，「詩」は援用されていない。ここで筆者が注目したのは，「屋舎儼然」に対する授業者の説明において，

> 教科書の注には「いかめしく」と書いてあるが，豪壮なお屋敷なんかじゃなくて，仕事にいそしみ，つましいながら充ち足りた暮しを送っている百姓家のたたずまいを想像してみてほしい。そんな家々を中心にして，ゆたかな感じの田や溜め池，桑畑や竹藪などが広がっているのが桃花源の風景なんだな。

とあるように，「記」の記述をめぐって，背後にある村人の生活を想像させる指導がなされている点である。このことは，「記」のみを読む場合、学習者の想像によって「記」の記述を補う必要があり，そのことによって桃花源のイメージが形成される，ということを意味する。

「空想」という点に注目して言えば，この時，学習者は，「詩」を製作した作者陶淵明と同様に，空想に遊んでいることになる。ここで「詩」を併せ読んだ場合，学習者は，作者の空想に導かれながら自身の想像をさらにふくらませ，理想郷としての農村を作者に同化しながら読みとってゆくことになるであろう。それは，学習者がより深く桃花源の世界に没入し，その魅力を存分に味わうということに繋がると考えられる。

ところで，中国では既に「桃花源記」の学習の中に「詩」が取り入れられている。次節では，「詩」を利用することが，どのような形で理想郷のイメージ形成に寄与するか，中国での利用のありかたに即して分析したいと思う。

四．中国における「詩」の利用

「桃花源記」は，中国においても取り扱われている教材である。本稿では，人民教育出版社版の『義務教育教科書 語文』（以下，『語文』教科書と称す）を用いるが，その８年級下冊に「桃花源記」が収録されている[8]。８年級は，日本の中学２年生に相当する。

『語文』教科書では，教材毎に，日本の教科書の「学習の手引き」等に相当する課題が掲載されている。「桃花源記」では，「積累拓展（発展的な課題）」の中に次のような設問がある。

> 結合課文及下面節引的「桃花源詩」中的詩句，討論「世外桃源」有哪些吸引人的地方，作者借桃花源表達了怎様的社会理想。
>
> 相命肆農耕，日入従所憩。桑竹垂余蔭，菽稷随時芸。春蚕収長糸，秋熟靡王税。荒路曖交通，鶏犬互鳴吠。俎豆猶古法，衣裳無新製。童孺縦行歌，斑白歓游詣（57頁）。

> 教科書本文と次に引用する「桃花源詩」の中の詩句を結びつけて，「俗世の外の桃源郷」はどのようなところが人をひきつけるか，作者は桃花源を借りてどのような社会の理想を表現したかを討論しなさい（「詩」の日本語訳は省略。本稿第２節に挙げた同詩の第7句から第18句を参照されたい）。

日本の場合と同様に，教科書本文としては「記」のみが掲載されているのであるが，この設問では「詩」の一部が取り上げられ，本文と併せて桃花源の村の魅力や理想を考えさせるものとなっている。取り上げられている詩句は，「記」の「土地平曠，屋舎儼然……」以降におおむね対応する部分である。なぜ，この箇所が取り上げられているか，については，『語文』教科書の教師用指導書に「設計意図」として次のように述べられている[9]。

通過与課文内容緊密関聯的拓展材料，推動学生対課文核心部分的理解（123頁）。

本文の内容と密接に関連する発展的資料を通して，本文の核心部分に対する学生の理解を促進する。

これに拠れば，当該箇所が「本文の核心部分」であるため，この箇所が取り上げられたということである。指導書には模範解答も掲載されているが，それを見ると確かにこの箇所が持つ重要性は理解できる。

這里景色優美，土地肥沃，物産豊富，風俗淳朴，社会平等，没有戦乱・圧迫和苛捐雑税，人們自食其力，生活和美安楽。作者虚構了一箇与黒暗現実社会相対立的世外桃源，寄託了自己対社会及政治的美好理想，表達了自己反対剥削圧迫・反対戦乱的願望，也反映了当時人民的美好願望（123頁）。

ここの景色は優美であり，土地は肥沃，産物は豊富，生活習慣は淳朴，社会は平等で，戦乱・迫害と苛酷な税がなく，人々は自力で生活し，生活は円満で安楽である。作者は，暗い現実社会と対立する桃源郷を空想し，社会や政治に対する自分の美しい理想を託し，搾取や圧迫・戦乱に反対する願望を表現し，また当時の人々の美しい願いを反映している。

この模範解答に拠れば，村の魅力として様々な要素が挙げられており，それらが作者をはじめとする当時の人々の理想や願望を反映したものであったとされている。やはり中国においても「桃花源記」に理想郷を読み取ることが求められているのであり，村の描写がその「核心部分」に当たると考えられていることが判る。

上の模範解答に見える村の魅力は，９つの項目に整理することができる。以下に，それぞれの項目が「記」「詩」のどのような記述から導き出されたものかについて見てゆく。

１．景色優美（景色が美しいこと）

ここでの景色の美しさとは，いわゆる山水自然の美ではない。「記」における「土地 平曠にして，屋舎 儼然たり」は，平坦に広がる土地や整然と立ち並んだ家々を言うものであって，人による手入れの行き届いた農村の美しさを指すと思われる。また，「桑」「竹」については，「記」では極めて簡単に触れられているに過ぎないが，よく繁ってゆたかな木陰を作っているとされる第９句「桑竹 余蔭を垂れ」という描写は，景色を彩るものとして捉えることができる。

２．土地肥沃（土地が肥えていること）

「記」の「良田」「美池」はいかにも作物が豊富に取れそうであることを予感させるものである。一方，「詩」では，土地の肥沃さについて特に言及していない。

３．物産豊富（産物が豊かであること）

「記」の「良田」「美池」は直接に産物を指すものではなく，この項目には当てはまらない。産物について具体的に描いているのは，「詩」の方である。第10句に「菽稷 時に随ひて芸(う)う」とあるように，田畑には豆や粟といった穀物が植えられ，秋の収穫（「秋熟」）は全(たぐ)てが自分たちのものとなる。また，「記」の「桑竹の属ひ有り」は暗に養蚕が行われていることを示すものではあるが，それ以上の具体的な記述はない。一方，「詩」においては第11句「春蚕 長糸を収め」という形で，養蚕のことが明確に言及されている。これらは，「詩」によってはじめて補われる産物の描写と言ってよい。

４．風俗淳朴（生活習慣が淳朴であること）

「記」では，外界から来た「漁人」をもてなす「便ち要(むか)へて家に還り，酒を設け鶏を殺して食を作る」という記述に，村人の素朴な歓待の様子を読みとることができる。しかし，この記述は，淳朴な生活習慣を描き出そうとしたものと言うよりも，単に村人が「漁人」をもてなしたことを述べたに過ぎない可能性も考えられる[10]。一方，「詩」では，第15～16句に「俎豆 猶ほ古法にして，衣裳 新製 無し」とあり，村人が難を逃れた秦の時代からの古い生活習慣を守り，衣服も特に目新しい意匠のものではないことを，明確に述べている。なお，衣服については，「記」にも「其の中に往来し種作する男女の衣著は，悉(こと)ごとく外人の如し」とする言及はあるが，これは外界との類似を指摘するものであって，淳朴さを述べようとするものであるとは断定できない。

５．社会平等（社会が平等であること）

６．没有戦乱・圧迫（戦争や迫害がないこと）

このふたつの項目については，「記」「詩」ともに明らかにそれと判る記述は見られない。ただ，「先世 秦時の乱を避け，妻子邑人を率(ひき)いて此の絶境に来たり，復(ま)た焉(ここ)より出でず。遂に外人と間隔す」（「記」），「嬴氏 天紀を乱し，賢者 其の世を避く。……往きし跡は浸(やうや)く復(ま)た湮(うづも)れ，来たれる径(みち)も遂に蕪廃す」（「詩」第１～６句。但し引用箇所外）のように，秦代の戦乱から逃れた結果，外界と隔離されたことを示す記述はある。

７．没有苛捐雑税（重税がないこと）

この項目については，「詩」の第12句「秋熟 王税 靡(な)し」が相当する。この句は，桃花源の村に対して

「王」による租税の徴収がないことを言うものである。一方，「記」には，租税に関する記述は見られない。また，この句は，租税を徴収する支配者，徴収される被支配者という関係が存在しないことを言うものでもあり，その意味では，項目５の「社会が平等であること」を表すものであるとも言える。

８．自食其力（自給自足の生活をしていること）

村人が男女ともに農耕に従事する姿は,「記」に「其の中に往来し種作する男女」と見える。しかし，この記述は彼らの働いている姿を言うものではあるが，その生活の様子を窺い知るには充分とは言えない。これに対して，「詩」の第７～８句には「相ひ命じて農耕に肆め，日 入りて 憩ふ所に従ふ」とあり, 村人は互いに声を掛け合って農耕に励む一方で，日が沈めば休息することができるのであって，そこには，余裕のある悠々とした生活を読み取ることができる。また，第11～12句「春蚕 長糸を収め，秋熟 王税 靡し」の句は，衣食の充分な自給を示唆するものであって，その余裕ある生活を担保するものと言える。彼らの自給自足の生活は, このような「詩」の記述によってはじめて読み取れるものである。

９．生活和美安楽（生活が平和で楽しいこと）

この項目については，労働に直接関わらない老人やこどもの描写によって代表されるであろう。「黄髪垂髫，並に怡然として自ら楽しむ」（「記」），「童孺 縱 に行くゆく歌ひ, 斑白 歓しみつつ游び詣る」（「詩」第17～18句）のように，「記」「詩」の双方に同様の記述を見ることができる。

このように見てくると, 桃花源の村について,「詩」が「記」の記述を補って余りあることは明白であろう。特に項目３・７・８は，「詩」があることによって，はじめて明確に読み取ることができるものである。また，その他の項目においても，「詩」は具体的な描写によって「記」の記述を補完する効果を上げている。

以上の分析によれば，「記」の記述は簡略に過ぎるものであって，村の魅力は作者陶淵明の空想――すなわち「詩」の様々な風景や生活の描写に展開されることによって，はじめてイメージ豊かに味わうことができる, ということが判る。その意味では,『語文』教科書が「詩」と組みあわせて考えさせようとした課題設定は，我々が大いに参考にすべき取り組みと言える。

そして「詩」を援用することは，単に桃花源の村の様子についての，部分的な理解を深めるということに留まるものではない。なぜならば，第２節に指摘しておいたように，村の魅力を感じ取ることができなければ，漁人や村人をはじめとする「記」の登場人物たちの心理や言動も理解できないと考えられるためである。「詩」に展開された作者陶淵明の空想を追った上で「記」を振り返ることは，村を巡る人々の様々な心情や，それらが交錯する物語全体の読解に寄与するものなのである。

五.「空想」する漢詩文

さて，これまでに「空想」ということに注目して「記」と「詩」との関係を捉え，「詩」を援用することの意義について考察してきたが，実は，その利点は他にもある。それは，空想を楽しむことや空想によって心を慰めること，という共通項で括ることによって，他の作品との関連性を見出すことができることである。このことは, 教材としての「桃花源記」の研究においては，これまで必ずしも論じられてこなかったことであるが，単元構想や教材の配置を検討する際に裨益するところがあると思われるため，ここで触れておきたい。

孟浩然「春暁」は，小学校教科書・中学校教科書でも取り上げられることの多い作品であるが，周知の如く，この詩は作者孟浩然が寝床の中から庭に散った花を空想する内容である。

１ 春眠不覚暁　　春眠 暁を覚えず
２ 処処聞啼鳥　　処処 啼鳥を聞く
３ 夜来風雨声　　夜来 風雨の声
４ 花落知多少　　花 落つること 知る多少

春の夜の眠りは日の出にも気づかなかったが，あちこちで鳴く鳥の声が聞こえてくる。昨夜は風や雨の音がしていたが，花はどれほど散っただろうか。

（孟浩然「春暁」）(11)

ここには，朝の鳥の声に刺激されて次第に意識が覚醒され，次いで昨夜の風雨の音の記憶がよみがえり，庭の落花へと連想が展開してゆく様子が簡潔に詠じられている。結句では庭に散り敷いたであろう落花が想像されているのであるが，これは必ずしも実景ではない。

この詩について，入谷仙介氏は，早朝の参内を事とする科挙官僚と対照的な，処士の生活から生まれた作品と捉えている（一海知義『漢詩の散歩道』1974年，日中出版。36～37頁）。確かに，孟浩然は科挙に応じたこともある（開元16年＝728年，40歳）が，及第することはなく，生涯官途に就くことはなかった(12)。朝寝の中で落花に思いを馳せることは，孟浩然のような処士のみに許される生活であって，そこに官僚生活に対する対抗の意識を読みとることは可能であろう。

１ 今夜鄜州月　　今夜 鄜州の月

2 閨中只独看　閨中 只だ独り看ん
3 遥憐小児女　遥かに憐れむ 小児女の
4 未解憶長安　未だ長安を憶ふを解せざるを
5 香霧雲鬟湿　香霧 雲鬟 湿ひ
6 清輝玉臂寒　清輝 玉臂 寒からん
7 何時倚虚幌　何れの時か 虚幌に倚り
8 双照涙痕乾　双び照らされて 涙痕 乾かん

今夜も鄜州の空に浮かぶ月を，妻は寝室からひとりで見つめているだろう。長安にいる父のことも，案じている母の物思いもわからないであろう子どもたちこそいじらしい。夜霧のために妻のかぐわしい黒髪も濡れ，冷たい月の光に白い腕も照らされているだろう。いつになったら寝台のとばりに寄り添い，一緒に月に照らされながら涙のあとを乾かすことができるのだろうか。

（杜甫「月夜」）(13)

安禄山の乱（天宝14載～宝応２年＝755～763年）の際，杜甫の家族は鄜州（陝西省富県）に避難しており，杜甫自身は長安に囚われの身であった。この詩は起句「今夜 鄜州の月」から始まるが，それは第二句に「閨中 只だ独り看ん」とあることから窺われるように，鄜州の妻の様子を想像しながら詠じられたものである。続く頷聯では，離れて暮らす父のことも，また父の身を案ずる母の思いも理解できない子どもたちの頑是ない様子が描かれている。そして頸聯では，美しくも憂いに沈む妻の姿が描かれる。かくて作者杜甫の妻に対する思いは，月光の中での再会という夢想に向かう。

こうした空想は，詩歌のみに見られるものではない。次に『論語』の例を見てみよう。

子路・曾晳・冉有・公西華侍坐。子曰，「以吾一日長乎爾，毋吾以也。居則曰，『不吾知也』。如或知爾，則何以哉」。…（中略）…「点。爾何如」。鼓瑟希，鏗爾，舎瑟而作。対曰，「異乎三子者之撰」。子曰，「何傷乎。亦各言其志也」。曰，「莫春者，春服既成，冠者五六人，童子六七人，浴乎沂，風乎舞雩，詠而帰」。夫子喟然歎曰，「吾与点也」。

子路・曾晳・冉有・公西華 侍坐す。子 曰はく，「吾れ 一日 爾に長ぜるを以て，吾れを以てする毋かれ。居れば則ち曰はく，『吾れを知らず』と。如し或ひは爾を知らば，則ち何を以てせんや」と。…（中略）…「点。爾は何如」と。瑟を鼓すること希に，鏗爾として，瑟を舎きて作つ。対へて曰はく，「三子者の撰に異なり」と。子 曰はく，「何ぞ傷まんや。亦た各おの其の志を言ふなり」と。曰はく，「莫春には，春服 既に成り，冠者五六人，童子六七人，沂に浴し，舞雩に風ふかれ，詠じて帰らん」と。夫子 喟然として歎じて曰はく，「吾れは点に与せん」と。

子路・曾晳・冉有・公西華が坐っていた。孔子は「私が年長者だからといって遠慮することはない。君たちは普段から『自分を認めてくれる人がいない』と言っているが，もし誰かが君たちのことを認めてくれたら，何をするかね」と。…（中略）…「点（曾晳）よ。君はどうかね」。点は瑟を爪弾いていたが，コトリと瑟を置いて立ち上がり，「お三方の答えとは異なります」と答えた。孔子は，「気にすることはない。皆もそれぞれ自分の考えを言っているのだから」と言った。点は「春の終わりには，できあがった春服を着て，五六人の若者，三四人のこどもと，沂水で水浴びをし，雨乞いをする舞台で風に吹かれて涼み，歌をうたいながら帰りたいものです」と言った。孔子はため息を洩らし，「私は点に賛成だ」と言った。（先進篇）(14)

上に引用したものは，子路・冉有・公西華の回答を省略しているが，彼らが全て政治家としての抱負を述べたのに対し，曾晳（点）のみは，子どもや若者を連れての遠足の楽しみを述べる。子路たち三人の語る未来とは方向を異にするものであるが，孔子は深いため息とともに，彼の夢に賛同の意を示したという。

「春暁」詩においては科挙官僚に対する反発，「月夜」詩では安史の乱による別離，『論語』では，「吾れを知らず」という不満を抱く弟子達の不遇が，それぞれの空想の背景にある。陶淵明が桃花源に心を惹かれた理由もまた当時の俗世に対する反発であったこと，「詩」の結びを見れば明らかである。

25 奇蹤隠五百　奇蹤 隠るること五百
26 一朝敞神界　一朝 神界 敞る
27 淳薄既異源　淳薄 既に源を異にし
28 旋復還幽蔽　旋ちにして復た幽蔽に還る
29 借問游方士　借問す 游方の士
30 焉測塵嚣外　焉んぞ測らん 塵嚣の外を
31 願言躡軽風　願はくは言に軽風を躡み
32 高挙尋吾契　高く挙がりて吾が契を尋ねん

この奇しき人々の足跡が隠されてから五百年，ある日，その不思議な村が姿を現した。しかし，村人の淳朴さと俗世の人の軽薄さとはもはや根本的に異なるものであり，彼らはたちまちのうちにまた隠れてしまった。さてお聞きしたい，この世の中にいる人々よ。汚

くうるさい俗世の外の世界をどのようにして測り知るのか。願わくは疾風に乗り，空高く飛んで私の心にかなうあの人々を訪ねたいものだ。

従来，上に挙げたような詩文と「桃花源記」との関連性は，特に注意されて来なかった。しかし，このように並べてみると，厳しい現実と対峙する一方で甘美な空想に救いを求めようとする古人の心が，明瞭に見えてくる。

日常は決して面白いことばかりではない。その中で，ふと空想世界に遊ぶことは誰しも経験のあることであろう。その我々と同様に，かくも楽しく美しい世界が古人の心の中に夢想されていたとすれば，古人も意外に我々と変わらない精神の持ち主であることに気づかされる。このことは，古人に対する共感，ひいては古典に対する親しみを生むことに繋がるであろう。その点に，「桃花源記」の新たな教材価値を見出すことができる。

注

（1）本稿で参照した教科書は，以下の通りである。

○三省堂『高等学校国語総合 古典編改訂版』（2016年３月検定済2017年３月）

○第一学習社『高等学校改訂版新訂国語総合古典編』（2016年３月検定済2017年２月）

○明治書院『新精選国語総合 古典編』（2016年３月検定済2017年１月）

○教育出版『精選古典Ｂ漢文編』（2017年２月検定済2018年１月）

○桐原書店『新探求古典Ｂ漢文編』（2017年２月検定済2018年１月）

○数研出版『改訂版古典Ｂ漢文編』（2017年２月検定済2018年１月）

○大修館書店『古典Ｂ改訂版漢文編』（2017年２月検定済2018年４月）

○筑摩書房『古典Ｂ漢文編改訂版』（2017年２月検定済2018年１月）

○東京書籍『精選古典Ｂ漢文編』（2017年２月検定済2018年２月）

（2）秋山愛「漢文入門教材の一提案―『桃花源記』を使って―」（東京学芸大学国語国文学会『学芸国語国文学』36号，2004年）では，「詩」の「秋熟 王税 靡（な）し」句に独自のユートピア像を読みとろうとする一海知義『陶淵明―虚構の詩人―』（岩波新書505，1997年。37～38頁）の指摘を取り上げ，そこから陶淵明の意図や思想を酌みとることが提案されている。また，吉川創太「高等学校国語教科書における『桃花源記』の教材分析」（長野県国語国文学会『研究紀要』13号，2020年）では，上里賢一「陶淵明における虚構のありかた（３）―「桃花源記并詩」を中心にして―」（『琉球大学法文学部紀要』８号，1981年）における「桃花源記」の寓意性に対する指摘を引用しながら，「詩」を踏まえた作品理解の必要性を説いている。これに対して本稿では，「記」と「詩」との内容的な繋がりという観点から，「詩」を取り入れることの意義を明らかにしようとするものである。

（3）本稿は，初級中学の教材を対象とするものであるが，普通高級中学（日本の高等学校に相当）における『語文』教科書の場合では，教科書本文以外の文章（関連教材）を利用して課題が設定されることは決して特別なことではない。それらの課題群が本文読解に果たす役割については，拙稿「中国の古典教育における関連教材の意義について―その『語文』教科書での利用をめぐって―」（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学論集』22号，2021年３月）を参照。

（4）取り上げた教科書に若干の違いはあるが，このように設問を整理した表は，吉川氏前掲論文にも掲載されている。或いは模倣の誹りを免れないかもしれないが，行論の必要上，注（1）で挙げた教科書をあらためて調査した上で本表を作成した。なお，村に注目させる設問の意図するところについて，吉川氏前掲論文では，「現実世界とはかけ離れた『桃花源』の様子に着目することで，一般の市民として生活していた漁人が異世界（桃花源）に迷い込むという，この作品の構造上の特徴を理解させようとする意図が読み取れる」と指摘されている。筆者は，「記」後半の人々の言動を理解するためのステップとして，この設問を捉えようとするものである。

（5）本稿では，清の陶澍注『靖節先生集』10巻（1956年，文学古籍刊行社）を底本とする。但し，旧漢字体は常用漢字体に改めた。書き下し文，現代語訳は拙訳による。以下，同じ。

（6）『老子』に次のように言う。

隣国相望，鶏犬之声相聞，民至老死，不相往来（隣国 相ひ望み，鶏犬の声 相ひ聞ゆ。民 老死に至るまで，相ひ往来せず）。

（7）このことについては，門脇廣文『洞窟の中の田園 そして二つの「桃花源記」』（2017年，研文出版）の第３部第１章「従来の『桃花源記』研究の概要」（初出は「陶淵明『桃花源記』小考―従来の理解とその問題点について―」，『大東文化大学漢学会誌』38号，1999年）および第２章「従来の『桃花源記』研究の問題点」（初出は「陶淵

明『桃花源記』小考―従来の理解とその問題点について・再説―」,『大東文化大学漢学会誌』41号,2002年）に整理されている。なお,門脇氏書では,『捜神後記』所収の「桃花源記」と『陶淵明集』所収のものとの性質の相違を明確に区別し，それぞれの「文脈に置いて」（163頁）検討すべきであることが主張されている。その意味では，本稿は後者に偏すると言わざるを得ないが，それは現行教科書が全て『陶淵明集』に拠っているという理由によるものである。なお,『捜神後記』では「詩」を収めていない。

（８）この教科書は，日本の文部科学省に相当する教育部組織が編纂したもので,2017年教育部審定,同年7月に人民教育出版社より初版が刊行された。本稿では2021年8月第５次印刷のものを利用した。

（９）人民教育出版社 課程教材研究所 中学語文課程教材研究開発センター編著『義務教育教科書 教師教学用書 語文 ８年級 下冊』（人民教育出版社,2017年12月。本稿では2019年12月第３次印刷のものを利用した）。

(10)鶏をつぶしてごちそうとすること自体は,古来,農村で普通に行われている習慣である。一海氏前掲書には，その早い事例として，『論語』微子篇の荷蓧丈人の章が紹介されている(21頁)。その他,陶淵明にも「漉我新熟酒，隻鶏招近局（我が新(あらた)に熟せる酒を漉(こ)し，隻鶏もて近局を招く）」（「帰園田居」五首 其五）という詩がある。これは近隣の農民との交歓を詠じた内容であり，他ならぬ作者の周囲においても，そうした習慣を見ることができる。ただし,「記」の記述は，その習慣の古さを述べようとしたものではない，ということに注意するべきであろう。

(11) 本文は『孟浩然詩集校注』（李景白校注，巴蜀書社，1988年。501頁）に拠る。

(12) 孟浩然の科挙受験については，劉文剛『孟浩然年譜』（人民文学出版社，1995年。開元16年の項，31 ～ 32頁）を参照。

(13) 本文は『杜詩詳注』（清・仇兆鰲注，中華書局,初版は1979年，本稿では2007年6月第7次印刷のものを利用した。309頁）に拠る。

(14) 本文は『十三経注疏』（台湾・芸文印書館,1985年12月,第10版。影印）所収『論語注疏』(100頁）に拠る。

謝辞

本稿は日本学術振興会の科学研究費補助金(20K02886）による研究成果の一部である。